

序章 一本書の狙いと論文紹介

大友一雄

本書は、2011（平成23）年にローマ教皇庁バチカン図書館において発見された17世紀前期から19世紀後期に及ぶ豊後国（大分県）のキリシタン関係資料群に関する調査・研究の成果をまとめたものである。以下、プロジェクトの経緯なども踏まえながら、本書の狙いなどについて記したい。

バチカン図書館による資料の受入れは、1953（昭和28）年、宣教師マリオ・マレガ（1902～78）が布教活動のかたわら任地の¹⁾大分などで収集したものを寄贈したことによる。

マレガは1929年12月、27歳で来日し、豊後地方のキリシタン史料を収集・研究したことで知られている。1942年には『豊後切支丹史料』を、1946年には『続豊後切支丹史料』を刊行しており¹⁾、これらは、現在に至るまで重用されるが、そこに収録された収集史料の原本は、永く所在不明となっていた。

2012年に大分県立先哲史料館が、続いて国文学研究資料館が資料群の存在をバチカン図書館において確認し、関係諸氏の取組みを通じて2013年11月にバチカン図書館と人間文化研究機構が調査・研究についての協定を締結した。同機構では、日本関連在外資料調査研究事業のなかに位置付け、共同研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書の保存・公開に関する調査・研究」（代表大友一雄）を発足させ、バチカン図書館と日本側関係機関、そして内外の研究者による「マレガ・プロジェクト」を開始した。日本側の機関では、人間文化研究機構国文学研究資料館・同国立歴史民俗博物館・東京大学史料編纂所・大分県立先哲史料館が参加し、国文学研究資料館が代表機関を務めた。

プロジェクトの目的は、a.資料群の概要調査の実施、b.バチカン図書館での保存管理と公開体制整備への協力、c.資料全点の目録作成、d.全点撮影を通じ

た画像データベースのウェブ公開、e.マリオ・マレガおよび資料群についての基礎研究、切支丹研究・日欧交渉研究をはじめとする諸研究の学術情報基盤の整備、f.調査・研究成果の公開などとした。期間は2015年度までを一つの区切りとし、2016～21年度は共同研究「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書調査研究・保存・活用」（代表同上、2021年度は太田尚宏）として活動を進めてきた。なお、資料群は総数1万4600点余で（大半は古文書類、イタリア語手書きメモなど）、いわゆる未整理状態にあり、劣化が進んだものも少なくなかった。プロジェクトは、こうした資料の状態なども踏まえて準備され、資料群の保存公開環境の整備を基本事業に据えつつ、さまざまな活用事業を進めるものとなった²⁾。

続いて、本書の狙いにかかわり、タイトルにもある「資料群の総合的研究」とはなにか、プロジェクトでの活動に触れながら確認したい。

プロジェクトにおける上述の基本事業・活用事業において留意したことは、バチカン図書館が永続的に資料群を保存・公開するためには、日本資料の取扱いや保存修復技術を習得することが同館において必要不可欠になるという点である。幸い同図書館は修復室が充実しており、同スタッフへ日本での知識や技術を伝えるための環境は整っていた。協働での活動を通じて志向したのは、一方的な伝授ではなく同館が有する伝統的な技術なども踏まえた新たな方式「バチカン・モデル」の創出を自覚的に進めることであつた。海外に所在する未整理アーカイブズ資料の管理・公開システムの構築に関する本格的な活動は、アーカイブズ学分野ではほとんど事例が見られない。現地との協働による新モデルの構築は、新たな挑戦であり、学術的な取組みが必要と強く意識された⁴⁾。「資料群の総合的研究」では、こうした取組みを大きな柱の一つに設定し、日本のアーカイブズ資料の保存・修復・目録記述・公開という協働での取組みを学術的な成果とする⁵⁾ことを目指した。

その取組みを便宜的に分けると、モノとしての物理的な管理と情動的な管理に関する研究になる。手順的には資料の保存環境を整え、誰もが利用できる資源化に関する研究ということになる。この一連の資源化の過程においては、モノとしての物理的な管理にもかわり、「概要調査台帳」「資料登録台帳」「修

復台帳」「撮影台帳」「目録台帳」などの情報が整備されている。それらは各段階の情報にさらに関係情報が追加される形で成立したものであり、これらの情報を通じてモノそのものの管理が整備されることになった。

ただし、情報資源化では、こうした資料を直接コントロールする情報にとどまらず、資料の情報価値を明確化する研究が欠かせない。具体的には、a.出所研究（資料を発生させた組織・集団の構造・機能・沿革分析、資料管理研究）、b.伝来研究、c.構造分析研究（資料群の階層構造分析）などである。本資料群に即するならば、a.出所研究では、コレクションを形成したマリオ・マレガ研究が必須となる。その基本情報は、資料活用においてはもちろん、資料管理においても重要となる。また、本資料群では豊後国臼杵藩宗門方を原出所とする資料群が多数を占めるため、同組織の構造や機能に関する研究は、資料の存在理由を確認する基本的分析となる。b.伝来研究は、資料群がどのように伝来し、現在に至るのか、その経緯に関する研究である。バチカン図書館での受入れも複数回に及ぶことから、同館にとっても管理情報として不可欠であり、資料利用者にとっても重要な情報となる。また、マレガによる資料群収集に関する研究も基本的なテーマである。さらにマレガ収集以前に江戸時代に発生した資料群がどのように伝来してきたのか、そもそも出所をなぜ離れることになったのか、これらも資料群に関する基本情報というべきである。

c.構造分析研究は、a.出所研究やb.伝来研究を踏まえて資料群が内包する秩序を階層構造的に編成するための研究である。とくに目録記述編成、データベースの階層表示では、分析が不可欠となる。データベースの使い勝手は、この構造分析研究の質に左右される面が少なくない。

こうした3つの研究は、アーカイブズ資料群の資源化では欠かせない重要な研究というべきであり、また、資料を利用するすべての人々にとって基本的な研究になることは間違いない。なお、資料群の大半を占める臼杵藩宗門方資料群の検討では、現地に残される臼杵藩関係文書・庄屋文書の調査・分析が必須の課題となったことはいうまでもない。⁷⁾

以上の事業遂行にかかわりプロジェクトでは、さまざまな分野の研究者が参加することになった。調査保存ではアーカイブズ学・保存学・情報学などの研

研究者が、目録の作成では江戸期の古文書とともにイタリア語の資料が多数見られたため、日本近世・近代史、キリシタン関係、地域研究、考古学（史跡）、日欧交渉史、イタリア史、日本文学の研究者が参加した。⁸⁾

概要調査などは専門分野を問わず参加し、プロジェクトの狙いや資料群の状態などを多く共有することになった。各分野間には極めて緊密な関係が生まれ、各自の研究を超えて多くの分野融合的な研究を実現する環境が整うことになったわけである。また、各専門分野の研究も従来の研究を一新する成果が生まれたといえる。

言い換えれば、研究は資料を生かし、資料の可能性を広く人々に伝えるための取組みのなかで自覚され、成果はプロセスのなかで生じた課題を追究する取組みを通じて集約されたということになる。

なお、本書は、これらの取組みと、その成果を公表することを目的とするが、いくつかの分野については、すでに成果の一端を公表している。本書では、それらをさらに発展させたものを一部収録することも行った。

すでに刊行・公表された成果には、概要調査・保存・修復などの取組みに関する研究に青木陸・アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン編『Preservation and conservation of Japanese archival document』（『バチカン図書館所蔵日本資料の保存と修復』、バチカン図書館出版部、2019年）、また、マレガが刊行した『豊後切支丹史料』正・続（1942・1946年）に関連しては、原資料の再確認を経て、省略部分も含めた史料集、松井洋子・佐藤孝之・松澤克行編『甦る「豊後切支丹史料」』（勉誠出版、2020年）が刊行された。さらに、概要調査の成果と資料紹介を目的とした大友一雄・三野行徳編『バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ資料 一概要と紹介一』（マレガ・プロジェクト〈国文学研究資料館〉、2021年）が作成され、インターネット上に公開された。資源化活動を踏まえた成果も「マリオ・マレガ資料データベース」（国文学研究資料館ホームページに搭載）として公開された。また、シンポジウムなどの成果を踏まえた紀要特集「キリシタンの跡をたどる ーバチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流ー」、⁹⁾「マレガ文書の魅力を探る ーマレガ神父・キリシタン統制・村社会ー」がある。

*

以上のような活動と問題関心から、本書は大きく「第1部 マレガ資料群の情報資源化とマレガ神父研究」、「第2部 豊後キリシタン・類族文書の研究」の2部構成とした。

第1部は、資料群の概要調査・修復・デジタル化・目録記述・データベース構築などの取組みと、資料収集者でありバチカン図書館への寄贈者であるマリオ・マレガについての研究である。これらの意義についてはすでに触れたところであり、活動に関する基礎的研究といえる。また、調査方法についての情報共有は、現物のモノ資料管理と情報資源化に欠かせないことは、すでに指摘してきたとおりであり、調査方法を後世へ伝えることの重要性に鑑みた成果ともいえる。マレガ研究については、同氏の経歴・研究業績などにとどまらず彼の調査活動や資料管理などについても追究した。それぞれ独立した成果であるが、同研究は資料群に関する基礎的研究という性格をあわせ有する。

第2部は、資料群の多数を占めるキリシタン関係文書群に関する研究である。マレガはこの資料を用いて著作『豊後切支丹史料』正・続を刊行し、現在に至るまで豊後地域キリシタン研究の基本的な文献となっている¹⁰⁾。しかし、マレガがその著作に収集できた数量はわずかであった。マレガ資料群のうち臼杵藩宗門方およびその関係資料数は1万1938レコード（総数の81%）であり、年代は寛永12（1635）年から幕末維新期まで長期に及ぶ。他にこれほどの規模で宗門方関係文書が確認された例はない。幕府は寛文4年（1664）11月、諸大名に宗門方の設置を命じ、この藩宗門方を通じてキリシタンへの統制を強化する。貞享4年（1687）には転びキリシタンとその子孫・類縁者である類族の把握を厳重化し、数代にわたる監視体制を導入した。藩宗門方は幕府宗門方（宗門奉行・切支丹奉行とも）の統括の下にあり、幕府の禁教政策の実行組織としての性格を有したといえる。諸藩の取り組みは、領内でのキリスト教伝播状況や転びキリシタンの存在形態などにより、それぞれ独自性を有したと考えられるが、必ずしもその実態が追究されてきたとはいえない。類族制度における藩宗門方の具体的な役割・機能といった基本的な問題についても制度導入の指摘にとどまり、本格的な研究は極めて限られる状況であった¹¹⁾。本書は現地大分に残される

資料群も含め分析を進め、政策導入に至る地域的な動向、制度運用と社会的な問題などさまざまな観点から新たな研究を提起することを試みた。

以上の諸点は、メンバーによる研究会などを通じて確認されてきたことでもある。なお、繰り返し確認したい点は、第1部と第2部とは双方向的な関係にあることである。こうした視角による研究は、今後も重要であり、さらなる研究の展開が期待される。本書はその第一歩ということになる。

については、つぎに各論文を紹介するものとする。

第1部 マレガ資料群の情報資源化とマレガ神父研究の大まかな狙いは、前に記した通りである。成果論文は9本となる。

デリオ・ヴァニア・プロヴェルビオ「バチカン図書館所蔵マレガ資料群の伝来について」は、バチカン図書館にマレガ資料群が収蔵されるに至った経緯を簡潔に示す。従来、資料群そのものが行方不明であったが、資料群の受入れ・移送に関する書簡がプロヴェルビオ氏によって発見され、その経緯が解明された。また、移送した際の荷造りがマレガ自身の資料管理を踏まえていたことも明らかとなった。この発見は、資料群の資源化に関わる重要な手がかりを我々に与えることになった。本論文は2014年11月、白杵市で開催されたシンポジウムでの同氏の報告とそこで利用されたイタリア語資料を、同氏の許可を得て日本語で紹介するものである。

青木 陸・太田尚宏・大友一雄「マレガ資料群の調査・保存と情報資源化」は、バチカン図書館および日本国内において実行した諸活動を「資料群概要調査と修復活動」「資料のデジタル化と目録作成」「マレガ資料群の資源化とデータベース構築」の3点にまとめて紹介する。資料全点の劣化調査と修復、バチカンによる資料全点のスキャニング、また、現状記録秩序と組織機能秩序の構造化の取組みは、アーカイブズ調査として新しい試みとなっている。

アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン「マレガ・プロジェクトにおける日本の古文書の調査方法について」は、資料調査・保存修復をバチカン図書館の修復管理担当の立場から論じたものである。欧州の資料保存修復士が多数参加したバチカンでの保存修復ワークショップでの取組みを通じての成果である。¹²⁾

大友一雄「バチカン図書館マリオ・マレガ資料群の全体構造」は、1万4600

点余に及ぶ資料群の全体像を資料群の出所・機能を基本に紹介する。臼杵藩専門方を出所とする資料が8割ほどを占め、他にも出所を異にするさまざまな資料群が存在すること、さらに、マレガ自身の資料（著作・原稿・書簡・メモなど）が存在することを明らかにする。

シルヴィオ・ヴィータ「豊後キリシタンの跡をたどるマリオ・マレガ神父—マレガ文書群の成立過程とその背景—」は、マレガ来日の歴史的な背景、マレガの大分時代の活動、収集資料群の成立事情などが、マレガがイタリアの親族に宛てた書簡や多くの日伊の文献・資料・聞き取りなどを通じて追究される。同人に関するもっとも基本的な研究成果といえる。

シルヴィオ・ヴィータ「マリオ・マレガの執筆活動とその『文脈』」は、宣教師マレガのキリシタン研究と日本文化研究の時代的な意味を、バチカンとの繋がり、および彼を取り巻く大分の在野の研究者との関係のなかで多角的に位置づける。とくに1925年のバチカン布教博覧会との関連性が指摘され、マレガの資料収集や日本研究がバチカンの布教活動のなかに捉えられた点が大きな成果といえる。

高見 純「宣教師によるキリシタン統制文書群の収集と整理 —マレガ目録の分析から—」は、マレガ自身の資料整理にかかわるイタリア語記録の分析から、同氏の整理と管理のあり方を検討のうえ、資料群の構造の歴史的解明に取り組み、同時に現存する資料群の構造理解に大きく寄与する。また、収集資料を通じて布教地研究を実践する宣教師と本国イタリアとの関係性についても言及する。

田中裕介「マリオ・マレガのキリシタン史跡調査 —1937～38年—」は、マレガが大分宣教時代に行った1937年から1943年のキリシタン関係の現地調査、とくにキリシタン墓に関する調査について、1937年前後の研究状況を踏まえながら考察する。マレガが史跡調査をはじめたきっかけと理由、マレガが捉えたキリシタン墓碑の範囲と自身の研究への影響などについて、地元研究者などとの関係にも留意した成果である。マレガは、イタリア語による詳細な史跡調査ノートを残しており、これらも成果に生かされた。

湯上 良「サレジオ大学図書館所蔵マレガ関連資料に見るマレガによる研究と資料保護」は、ローマのサレジオ大学図書館「マレガ・コレクション」に収

蔵されるマレガ自身の日本関係イタリア語原稿や手紙類を対象として、これらの伝来・構成を分析し、マレガ自身の日本研究の変遷などを明らかにした。また、バチカン図書館所蔵マレガ資料との関係、とくに同資料の送付の時期や動機についても、アーカイブズ資料の保護の観点から論じている。

第2部 豊後キリシタン・類族文書の研究では、マレガ資料および地域に残された資料を用いた豊後国のキリシタン・類族ならびに臼杵藩宗門方役所に関する最新の研究成果となる13本の論文を収録した。

佐藤晃洋「臼杵藩におけるキリシタン禁制政策と民衆統制」は、村井早苗氏や豊田寛三氏などの研究を踏まえ、禁教初期における対策が、個人の改宗から「いえ」（家族をはじめ名子・下人等を含む家内）を単位とする統制へ、そして村など行政単位による統制へと推移したこと、また、キリシタン禁制政策としての宗門改の目的が、親族管理から民衆全体の統制政策へと変容することを提起する。

大津祐司「寛永12年の『南蛮誓詞』と臼杵藩のキリシタン禁制」は、臼杵藩宗門方役所に伝えられた寛永12年（1635）の「きりしたん宗門御改ニ付起請文前書之事」（「南蛮誓詞」と呼ばれる）三百数十点に注目し、同年の「きりしたん宗門御改之御帳」との関係、「南蛮誓詞」作成の背景を追究するとともに、同時期の臼杵藩における寺院の動向・状況、「南蛮誓詞」と「きりしたん宗門御改之御帳」のその後の活用などについて明らかにする。

大橋幸泰「豊後崩れと類族改制度」は、近世日本の国家と社会が「切支丹」排除のために設定した秩序維持のための制度が宗門改制度と類族改制度であるとし、とくに制度的な検討が不十分な後者について、集団型の露頭（ここでは豊後崩れ）の問題とあわせて取り上げることで、類族改制度を社会的な状況のなかにはじめて位置づける。

三野行徳「臼杵藩宗門方役所とキリシタン統制」は、臼杵市に残された稲葉家文書なども活用しつつ、従来曖昧であった宗門方役所の成立、絵踏・宗門改など主要業務の遂行と意義、類族の監視など役所の主要機能を解明し、通時的なキリシタン統制の実態に迫り、近世社会における統制の意味についても言及する。

太田尚宏「白杵藩宗門方役所における文書管理の諸相 —取納袋・端裏書・保存形態に着目して—」は、宗門方役所文書の外形的情報、すなわち文書の端裏書、資料の量み方や裁断のあり方などにも注目しながら、宗門方役所の文書管理のあり方の一端を明らかにする。文書管理の歴史を分析する際、外形的物的情報が有力な素材となり得ることを実証したものである。

三野行徳「近世武家社会とキリシタン統制 —白杵藩家中の類族を考える—」は、武家社会における転びキリシタン・類族の把握と、統制について検討する。17世紀のキリシタン統制の主要な取締対象は武家であるとし、幕府を頂点とする序列整備のなかで、キリシタン統制が武家社会においてどのような意義を有したのか、武家に対する絵踏や類族制度に注目し、武家社会での統制のあり方を提示する。

大橋幸泰「キリシタン類族改制度と村社会 —白杵藩の場合—」は、類族改の社会にとっての意味を、非類族に対する扱いを含めて検討し、厳重な管理のもとに置かれた類族を村社会がいかに受け止めたのかという新たな議論を提起し、その理由について推察する。

清水有子「豊後白杵藩の村社会における女性類族の婚姻状況をめぐって」は、17～18世紀の白杵藩における女性類族の婚姻状況を明らかにし、類族令の規定が類族の村社会における待遇面にもたらした影響について分析を行い、当初の類族同士の同類婚から非類族との婚姻へと移行したこと、その原因に幕府が享保年間（1716～36）以降に段階的に打ち出した「類族離れ」の影響があることを新たに提起した。

佐藤晃洋「豊後諸藩における類族制度の展開」は、豊後国におけるキリスト教布教の拠点であった地域を含む白杵藩・岡藩と、積極的な布教活動が行われなかった地域の佐伯藩を対象として、貞享4年（1687）に幕府が命じた「類族」制度への対応を比較・検討することを通じて、各藩の「類族」範囲、取組みの特色・差異等から「類族」制度の展開を明らかにした。

櫻井成昭「白杵藩のキリシタン禁制と寺院」は、初期には宗門改を履行できる独立した寺院が所在しない地域であった大分市丹生地区の原村と久土村を事例に、近世仏教および寺院の制度的特徴である寺檀制が、キリシタン禁制とか

かわって整備された具体的な側面を実証する。寺院の側面からキリシタン統制の具体的な展開について示した成果といえる。

村井早苗「豊後国大野郡野津における寺院と類族」は、臼杵藩領内にあった豊後国大野郡の正光寺と了仁寺の住職の妻が、転びキリシタン本人同然、転びキリシタン本人であったことに注目し、これを手がかりに、野津地域におけるキリシタン布教の展開、取締りなどに深く関与した寺院の教化活動について追究する。地域における近世初期のキリスト教展開の様相と仏教寺院との関わりを、マレガ資料での事例をもとに考察した成果である。

宮間純一「明治初年のキリシタン統制に関する一考察 ―宗門改を中心に―」は、明治新政府発足直後のキリシタン統制を、とくに宗門改の変容に焦点をあてて検討するものである。この時期の国内の宗教統制の実態は、いまだ十分に把握されているとはいいがたい状況にあり、臼杵藩の動向を通じて維新政府の対応のあり方が具体的に示されることになった。

平井義人「臼杵藩におけるキリシタンの数と分布」は、町方・村方から宗門方役所に提出された龐大な「出生届」「死骸改証文」の類族情報をもとに「転びキリシタン」の分布を復元したものである。集約作業にともなう課題なども整理されており、情報価値を高めている。

註

- 1) 『豊後切支丹史料』（サレジオ会、1942年）、『続豊後切支丹史料』（ドン・ボスコ社、1946年）。
- 2) これらの事項のうち、とくにバチカン図書館が支援を求めたのは目録作成、資料修復であり、これらは2013年2月の同館長から国文学研究資料館長宛の手紙に明記される。プロジェクトは、こうしたバチカン側の希望や資料状態、および全点撮影・公開、資料研究などについての双方の意向を調整して確定したものである。
- 3) 「バチカン・モデル」の創出は、双方の従来からの技術や知恵をすり合わせる場となった。双方にとって得がたい機会となったことはいうまでもない。
- 4) バチカン図書館が所蔵資料をアーカイブズ学の観点で取り扱うかどうか、当初は危惧されたが、保存修復管理、デジタル画像作成、データベース構築などのスタッフは、いずれもアーカイブズ学を前提として対応していた。海外文書資料調査・目録作成などの共同活動では、資料の性格に左右される点も少なくはないが、その前提となる問題としてアーカイブズ学に関する知識・理解が共通の土台として欠かせないことを再認識させられた。
- 5) ややもすれば、基本的調査活動を専門分野の諸研究の充実化に利用するという一方通行の議論が広く見られるが、本研究は、各場面が研究対象となっており、研究の取組みは双方向的・

学融合的なものとして存在したことが大きな特徴といえる。

- 6) 拙稿「アーカイブズを理解する ―史料群構造論の展開―」（国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』下巻、柏書房、2003年）。
- 7) 主な古文書群には白杵市所蔵白杵藩関係文書、大分県先哲史料館所蔵池見家文書、大分市立歴史資料館所蔵高橋家文書などがあり、これらの一部については各機関の計らいによりマリオ・マレガ資料データベースに関連付けて公開させていただいた。
- 8) なお、学術的な場面に限らずバチカン側とのコミュニケーションの場において、イタリア語に精通した方々の支援が欠かせなかった。多くの方々のご助力があったことを明記しておきたい。
- 9) 「キリシタンの跡をたどる ―バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流―」（『国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇』第12号、2016年）、「マレガ文書の魅力を探る ―マレガ神父・キリシタン統制・村社会―」（『同上』第14号、2018年）参照。なお、両紀要に掲載された特集論文の大半は、その後の研究の進展を踏まえ、調整のうえ本書に収めた。その他の研究成果については、「マリオ・マレガ資料データベース」のトップページにあるプロジェクトの記事を参照されたい。
- 10) 村井早苗氏が豊後キリシタン禁制の確立過程を追究した『幕藩制成立とキリシタン禁制』（文献出版、1987年）、同『キリシタン禁制と民衆の宗教』（山川出版社、2002年）などでも重要な史料となっている。
- 11) 藩関係では豊田寛三「豊後国におけるキリシタン類族と村落」（後藤陽一編『瀬戸内海地域の史的展開』福武書店、1978年）、安澤秀一「宇和島藩切支丹類族改・宗門人別改・公儀え指上人数改の基礎的研究」（『史料館研究紀要』12号、1980年）、溝渕利博「讃岐高松藩『切支丹宗徒人名録』に関する基礎的研究 ―讃岐高松藩のキリシタン禁制と『切支丹宗徒人名録』の歴史的 성격―」（『研究紀要』56・57合併号、高松大学、2012年）があり、大坂町奉行支配下では藤原有和「摂州東成郡天王寺村転切支丹類族生死改帳の研究」（1・2）（『関西大学人権問題研究室紀要』49・50巻、2004・2005年）、小野田一幸「天王寺村における転びキリシタンと類族の動向」（『部落解放研究』191号、2011年）などが見られる。
- 12) 本論文は、青木睦・アンヘラ・ヌーニェス＝ガイタン編『Preservation and Conservation of Japanese archival document』（バチカン図書館出版部、2019年）に収録されたガイタン氏の英語論文を翻訳・調整のうえ転載した。

